

デカセギと家族 (6)

— ミドルクラスのハビトゥスと周辺の労働力という現実の間・F一家の場合 —

稲葉奈々子

樋口 直人

要約

アルゼンチンから渡日した家族は、教育に対する投資に力を入れるというミドルクラスのハビトゥスを示している。このハビトゥスは日本での就労によって得られた稼ぎで支えられてきた。しかし南米出身者の多くは非正規雇用で就労しているため、このハビトゥスを支える物質的な基盤は不安定である。本稿でケーススタディを行うF一家の場合、アルゼンチンよりも日本のほうが子どもの将来に可能性があるという判断で定住を決意したが、不安定就労ゆえの父親の失業により、ミドルクラスのハビトゥスを支える基盤が揺らいでいる。

1. 問題の所在

アルゼンチンから日本に来た人たちに話を聞いていると、子どもの教育に熱心な親が多いことに驚かされる。南米の日系人が教育投資に力を入れてきたことは、半ば常識と化しているが、南米出身者の中でも滞日アルゼンチン人の教育達成が高いことを示す傍証がある。下の表は、国勢調査への回答者のうち15～19歳の就労・就学状況を示したものである。把握率がやや低いことから信頼性に若干の留保がつくが、現時点でもっとも包括的に十代後半の若年層の生活状況を表すデータとあってよい⁽¹⁾。

このデータは、日本の義務教育修了年齢に達してから渡日した者、日本で高校を卒業してから就労している者を含むため、実際の高校進学率はここで示された値より高いと思われる。ここでは、ブラジル国籍で通学者の比率が際立って低いこと、アルゼンチン国籍では1995年の時点から通学者の比率が高いことに注目しておきたい。その理由はまだ明らかではないが、後述するようなアルゼンチン国籍者の「ミドルクラスのハビトゥス」が背景にあると、現時点では推測している。アルゼンチンから渡日した人たちのミドルクラスの性格については、論点を深めつつ今後発表していきたいと考えており、本稿はそのための素描と位置づけられる⁽²⁾。

本稿の記述は、F一家の親子4人に対して行った聞き取りをもとにしている。40代の両親と小学校高学年だった長女には2008年11月に、高校受験を終った長男には2009年3月に会っている。再訪した際には、後述のように失業中の父親も自宅にいたため、父親にも追加の聞き取りをおこなった。なお、両親はほとんど日本語ができないのでスペイン語で聞き取りし、子ども2人は日本語が流暢なため日本語で話してもらった。

F一家の父親（以下夫）は非日系アルゼンチン人で、母親（以下妻）は日系三世である⁽³⁾。

表 南米国籍者・十代後半の通学比率

	総数	労働力人口					非労働力人口		通学者No.	
		小計	主に主事	家事の他仕事	通学の他仕事	休業	失業	家事		通学
2000										
アルゼンチン	124	55	43	4	2	0	6	4	54	45.2
ブラジル	13582	9674	8577	198	207	78	614	444	2347	18.8
ボリビア	148	56	42	4	3	1	6	5	61	43.2
パラグアイ	90	59	52	1	1	2	3	4	19	22.2
ペルー	1755	765	579	17	59	7	103	66	731	45.0
1995										
アルゼンチン	115	60	44	2	7	1	6	6	43	43.5
ブラジル	11321	9817	9055	240	73	47	402	322	950	9.0
ボリビア	49	24	21	0	1	0	2	5	13	28.6
ペルー	1110	733	559	44	26	5	99	48	284	27.9

出典：『国勢調査報告 外国人特別集計結果』1999年、『平成12年国勢調査報告 第8巻 外国人に関する特別集計結果』2004年

夫婦ともインタビュー時点で四十代半ばであり、ブエノスアイレスで中学（日本の高校相当）を卒業してから事務・販売の仕事をしていた。長男はインタビュー時点で中学3年生であり、公立高校への進学が決まっている。長女は小学校6年生で、長男が日本生まれなのに対して長女はアルゼンチンで生まれている。

2. 最初のデカセギ

F一家で最初にデカセギに出たのは妻であった。彼女の父親は広告の撮影をするカメラマンであり、経済的な問題はなかったが仕事に疲れてストレスもあったという。そこで、違う環境で働いて生活を変えたいと思い、1986年に日本に働きに行った。このときは、親子で日本に行ったが、父親は寒い工場での慣れない夜勤により2ヶ月で肺炎になって入院してしまった。兄も日本で病気になったため、電気関係の工場半年だけ働いてすぐにアルゼンチンに帰国したという。

2度目の渡日は、1989年にふたりが結婚してすぐのことだった。このときはデカセギ目的であり、日本に到着してすぐに妻が前回働いた工場に派遣され、夫婦で3年働いた。その後、妻が1992年に長男を出産し、働かず1年たった1993年にアルゼンチンに戻った。夫は1年長く残り、電気関係の工場5年間働いて1994年に帰国し、それからしばらくしてブエノスアイレス市内で店を借り、アルマセン（食料品店）を6年くらい営んでいた。

3. 日本への移住

(1) 移住から失業まで

妻にとっては3度目の、夫にとっては2度目の渡日は、それまでのものとは性質が異なる。過去2回がデカセギだったのに対して、今回は日本に永住するつもりで日本に来てい

る。そのような移住を決意させたのは、経済状況というよりも治安の問題であった。2002年の経済危機の最中、ある朝妻が家の前の道を掃除していたところ、見知らぬ男が走ってきた。妻は危険を感じて家に入り、すんでのところ侵入されずに済んだという。当時は治安が悪化していたこともあり、アルゼンチンでは気が休まらない、もっと安心できる日本に行こうと話し合い、双方の家族の了承も得て日本への移住を決意した。

一般に、アルゼンチン出身者に対して聞き取りをしていると、「静かな」「平穏な」を意味するtranquiloという言葉はアルゼンチンに対して当てられる。日本は、「忙しい」を意味するocupadoという言葉で形容されることが多い。tranquilo—ocupadoという対比のもと、日本は仕事をするところ、アルゼンチンは生活するところと通常は位置づけられる。しかし、F一家の夫は日本にtranquilidad (静かさ・平穏) を求めたと説明していた。ここでは、tranquilo—peligroso (危険な) という別の軸が立てられ、平穏な日本と危険なアルゼンチンという性格付けがなされるため、日本は就労の地ではなく永住の地とみなされる。

移住に際してもっとも辛かったのは、家族と別れることだったという。子どもたちからみて母方の祖父母とは同居しており、毎週末には母方の曾祖母や父方の祖父母の家を家族で訪問するくらい、家族の関係は強かった。が、子どもが将来とりうる可能性は日本の方が大きいという判断があった。長男はアルゼンチンで私立学校に通っていたが、それはアルゼンチンの公教育の質の低さによるもので、私立学校の学費を賄えない家もたくさんある⁽⁴⁾。日本ならば、誰もが一定水準の公教育を受けることができるから、日本で働いて子どもにも教育を受けさせたほうがよいという⁽⁵⁾。

もっとも、F一家は妻の実家で生活しており、そこでは妻の両親と同居していたため、子どもたちにとって日本は身近なものだった。だから日本に行ってみたいという気持ちがあったので、移住を告げられても抵抗はなかったが、その当時は年長の長男でさえずっと日本に住むということまで想像できなかったという。

移住を決めてから、ビザをとるための手続を始めたが、日本人の配偶者等の査証を得られる妻は簡単に取得できたものの、定住者査証になる夫と子どもの手続は遅々として進まない。そこで、2002年に妻が一足先に渡日して、家族の渡航を持ちつつ働いてお金を貯め、家族が来たときにすぐ家族用のアパートを借りたり、学校に入れるよう準備していた。結局、家族全員がビザを取るには1年かかっており、その間妻は単身で働いていたことになる。

妻は当初、東京都内の弁当工場で働いていたが、夫の仕事もある神奈川県内に移動した。最初の2週間だけ東京におり、子どもも1週間だけ学校に通ってすぐに、神奈川に引っ越して転校している。それから妻は電気関係の工場で6年間ずっと働いており、夫は2年間電気関係の工場、2年間自動車関係の工場の間接雇用で働いてから、アルゼンチン人の知人の紹介を受け電子部品工場で直接雇用で働いた。11月にインタビューした時点では2008年9月の金融危機の影響を受けて、妻の同僚の夫が複数解雇されている状況にあった

が、F一家には仕事があった。しかし、夫の直接雇用の仕事は1年契約でその後は更新されず、2009年に入ってから失業している。

(2) 孤立した生活

夫は非日系人で日本語もほとんどできないことに加えて、社会関係資本にも恵まれていないことから、再就職にはかなりの困難を伴うと思われる。職場は、夫婦とも南米出身者が多数を占めるラインであるが、南米の人たちとの付き合いを意識的に避けているという。夫は非日系人であり、妻は三世で街中で育っていることから、アルゼンチンの日系人との知己が多いわけではなく⁽⁶⁾、日本で会ったり連絡を保ったりしている知人はいないという。親族についても、妻の伯父と叔母にたまに電話をする程度で、夫のほうは全員がアルゼンチンにいる。

日本で知り合ったアルゼンチンの友人も、数人食事をする程度の関係があるのみで、広い付き合いはない。日本の生活に慣れているので、職場の付き合いでアサード⁽⁷⁾をすることはあっても、南米出身者の自主的な集まりによるアサードに行ったりすることはないという。アルゼンチン人との付き合いは面倒で、もっと静かに暮したいというのが夫婦の希望である。

さらに日本語ができないので、日本人の同僚とは集団で食事に行くことがある程度で、PTAでも付き合いようにはならない。一般に、南米出身者の社会関係の特徴は、デカセギ者同士の付き合いに限定されることにあるが、子どもの学校は数少ない日本人との接点になる。しかし、それとても日本語の壁により関係が構築されていかず、南米出身者との付き合いを意識的に避けていることから、F一家は全体として孤立した状況にあるといえるだろう。

このことは、失業などのリスクに際して職業安定所や新聞広告のような手段に対する依存を強め、再就職の確率を低めるだろう。ただし、南米出身者が軒並み解雇される現状では、その内部のネットワークをもってしては次の職にたどりつく可能性はほとんどない。その意味では、日本人との付き合いが社会関係資本としてはもっとも重要であり、F夫婦自身は日本の生活をする志向をもっているが、日本語の壁が関係形成を妨げている。

4. 子どもの状況

長男は小学校5年生に当たる年齢で渡日したが、日本語がまったくできなかったため4年生に入りなおした。長女はアルゼンチンでは就学前だったから、日本ではそのまま小学校に入学している。F一家では、友人が来たときを除き家の中ではスペイン語しか使ってはいけないとルールを決めているが、渡日年齢の違いにより長男はスペイン語でまず考え、長女は日本語のほうが得意という違いがある。家の外に出ると、兄妹間では日本語で話す。

そのため、就学に際しても小学校1年から始めた長女とは異なり、長男は2年半くらい国際学級に通いつつ日本語を学んだ。アルゼンチンでは、私立の小学校で成績も非常に良かった

たのが、日本に来て何もわからず、成績も格段に落ちたという。それが半年くらいで日本語がわかるようになり、5年生からは1日1時間だけ国際学級に通うようになった。勉強には6年生で追いつけるようになり、現在は真ん中程度に位置しており5段階評価で9教科のうち3が2つであとは4である⁽⁸⁾。

暗記が得意なので社会と理科が得意科目だというが、国語だけは苦手科目のままであった。現在は理科系での大学進学を希望しているが、理科への積極的な関心というより「国語が苦手なのは多分もうなおらない」からだという。長男自身は、今ではスペイン語も日本語も同程度の使いやすさというが、日本語を母語にできているわけではないということだろう。長女は日本語が第一言語であり、国語に対する苦手意識はない。

長男も長女も、スペイン語で話をする友人はいない。長男は学校の国際教室で一緒だった生徒とも日本語で話すし、長女は週1回電車に乗って文化センターでスペイン語を習っているが、そこで一緒に学ぶ友人とも日本語で話しをする。上述のように、南米出身者と家族ぐるみの付き合いがあるわけでもなく、スペイン語を使うのは家庭内とアルゼンチンの家族や友人に電話したときに限られる。もっとも、アルゼンチンとのつながりがなくなっているわけではなく、2005年には妻と子ども2人がアルゼンチンに3ヶ月遊びに行ってる。長男は、就学後に渡日したためアルゼンチンにいたときの友人と今でも手紙やメールで連絡をとっている。時には、祖母が送ってきた雑誌を眺めるようなこともあるし、アルゼンチンに行ったときに何冊か小説を買ってきたが、インターネットでスペイン語のニュースを見る以外は、長男がスペイン語を読むことはなくなったという。

F一家に限らず、アルゼンチン出身者は子どもに習い事をさせていることが多い。長男は、アルゼンチンで柔道を習っており、日本では柔道場がないので代わりに空手を週3回習っていた。中学校に入ってから運動部に入ったため空手をやめているが、中学2年生になってからは週3日塾に通うようになった。長女も、兄と一緒に空手を習い、新体操のクラブにも通っていたが、現在はピアノと前述のスペイン語だけ学んでいる。

5. 考察 — 大量失業とミドルクラスのハビトゥスの矛盾

最初から日本にずっと住むつもりで来たF一家は、日系人のデカセギのなかでは少数派に属する。その意味では、子どもに対する習い事への投資も長期滞在志向ゆえの行動にみえなくもないが、筆者らが聞き取りした限りでは一時滞在志向の家族も子どもにとってその都度大事なこととして習い事をさせていた⁽⁹⁾。家を買いたいが、まだそれだけの余裕もないというF一家だが、子どもに対しては耐乏を強いるわけではない。

こうした行動は、アルゼンチン日系人の多くが新旧のミドルクラスに属していることと、かなりの関係があるだろう。一世の大多数と二世のかなりの数は、農業にせよクリーニング業にせよ、自営業に従事している。二世以降の一定数は、ホワイトカラーの仕事について新中間層となっている。その意味で、ミドルクラス的な余裕を持った生活の中で、多くの日系

人は育ってきたといってよい。たとえば、一世がデカセギ以前に日本を訪問するのは、少数のデカセギ先駆者を除けばかなりの費用をかけなければならないが、マレッタとレポレの調査では半数強が日本訪問を果たしている (Maletta y Lepore 1995 : 491)。

F一家は、両親が三世・非日系で中学卒であり、アルゼンチンの学歴としては中程度に属する。だが、親の代からある家でゆとりのある生活が可能であり、夫婦での1回目のデカセギの後にはその貯金で食料品店の開業も実現してきた。その意味で、アルゼンチンではミドルクラスとしての生活——持家、新しくはないが自家用車を所有、子どもを私立学校に通わせる、バカンスの旅行——が可能だった層だといえる。そうしたミドルクラス的な行動様式を、日本で継続するときにもっとも実現しやすいのは、子どもの教育になる。

一方で、F一家が日本でもミドルクラス的なハビトゥスを行動に移せていたのは、アルゼンチンにいる夫婦の両親もミドルクラスであることにもよる。アルゼンチンで三世代同居していた家は三階建てであり、日本に来て家が狭くなったのを、長男は印象的な出来事として挙げていた。プエノスアイレス市内に大きな家があり、双方の親もまだ働いているため、日本から仕送るする必要はない。アルゼンチンから日本へのデカセギで特徴的なのは、送金に依存することがあったとしてもその範囲は核家族止まりであり、その意味で大家族の扶養で送金が消えるといった事態が生じていないことだった (樋口・稲葉 2009c)。

だが他方で、日本での労働による毎月の貯蓄額は、筆者らが調査したイラン・バングラデシュ人非正規滞在者と比べても低い水準に留まっているように思われる (樋口・稲葉・丹野・福田・岡井 2007)。これは、日系人が家族滞在であることにより一部は説明できるだろう。だが、夫婦で共に働けば月収は50-60万円に達することから、貯蓄額が増えてもおかしくはない。問題は出費額で、毎月の出費額は単身者であってもイラン・バングラデシュ人のそれより多いと思われる。

こうした出費額の多さは、ミドルクラス的なライフスタイルを日本にあっても維持していることで、かなりの程度説明できるだろう。子ども2人に習い事をさせていけば、公立学校に通わせていても数万円の出費が必要になる。妻と子ども2人がアルゼンチンに帰省すれば、それだけで100万円以上はかかるだろう。遊興で使うような浪費でないとしても、ライフスタイルの維持に必要な出費が一定水準に達することで、貯蓄額の伸びは大きく制約される。

6. 脆弱な生活基盤 —— 結語に代えて

しかも、こうしたミドルクラス的な生活を支える経済的基盤は、非常に脆弱なものである。それまで夫婦で60万円近くの月収を得ていたF一家だが、2009年3月にFさんの家を再訪した際、父親は失業中だった。その時点では失業保険を受給していたが、職安に行っても仕事はなく再就職のめどは立っていない。母親は解雇されていないが、母親の収入では9万円の家賃と最低限の生活費を維持することは不可能である。子どもの将来のために少しずつ貯蓄してきた分、当座の生活を支えることはできるだろうが、父親が早く働かなければ子ども

の大学進学もままならない。

経済危機は、こうした家族を大量に生み出している。F一家は、妻の仕事がまだ続いており、日本でずっと住むことを前提に将来のための貯金もしてきたから、失業の影響はまだ少ないと考えられる。ミドルクラスのハビトゥスは、仕事があるときには子どもへの教育投資へと向けて日本での「1.5世代」の下方移動を食い止める結果をもたらすだろう⁽¹⁰⁾。だが、短期的には子どもも早く働かせるような短期的な利得の最大化戦略の方が、貯蓄を最大化させて影響を最小限にできるかもしれない。

しかし、どちらの戦略をとろうとも、日系人家族が構造的な脆弱性にさらされていることは、本稿の記述からもみてとれる。脆弱性とは、将来的に貧困に陥る可能性を指して使われるが (Dhanani and Islam 2002; 黒崎 2009)、共稼ぎにより一定の収入があったF一家は、多くの日本人の家庭とは異なり失業のリスクが非常に高い状態にあった。それが噴出したのが、2008年末以来の経済危機であり、ブラジル人学校が一気に危機に陥ったがごとく子どもへの教育投資も不可能になる可能性がある。かといって、短期的な利得最大化は中学卒で子どもを社会に送り出すことを意味しており、脆弱性を次の世代にまで持ち越す結果をもたらしてしまう。

こうした議論はあくまでこれまでの調査からの予測に過ぎないが、今回の日系人の大量失業は80年代後半の南米でのハイパーインフレーションと同程度に重要な、デカセギの帰趨に影響を及ぼす事件である。現実には何が生じているのか、きちんとした調査とそれにもとづく対策がこれほど求められるときはないだろう。

- (1) 1995年の調査結果では、パラグアイ国籍について独立した集計がなされていないため、ここでは除いてある。また、2005年の国勢調査結果もすでに刊行されているが、掲載されている国籍が激減しており、アルゼンチン国籍の集計結果が出ていないため、掲載していない。
- (2) 本稿は、デカセギと家族に関する一連の記録の一環であり (樋口・稲葉 2008a, 2008b, 2009a, 2009b)、本格的に論点を展開するに先立ってそれぞれの家族の特徴を描き出すことを目的としている。
- (3) ただし彼女の両親が二重国籍だったため、査証は「日本人の配偶者等」である。
- (4) 私立学校の学費は学校によって異なるが、最低賃金 (2008年9月現在で1200ペソ = 3万円強) 程度はかかることが多い。最低賃金といっても、この額の給料を得ているのは全就業者の半数と言われており、半数の労働者の収入では学費にすらならない。私立学校に行かせること自体が、ミドルクラスでなければできないことを示す。
- (5) 日本語ができないので、アルゼンチンと日本のどちらの教育が良いかはわからないとしつつも、日本の公教育に対しては肯定的である。アルゼンチン人の親の中には子どもが学校の掃除をすることを悪くいう者もいるが、自分は掃除するのも教育だと思っていた。
- (6) 一般にアルゼンチン日系人の従事する二大産業はクリーニング業と花卉栽培といわれており、Maletta y Lepore (1995: 484) が1986年に実施した調査では、アルゼンチンに移民してからの初職のうち47.8%がクリーニング業で、34.5%が花卉・野菜栽培であった。この二大産業は、日系コミュニティの分布に大きな相違をもたらすこととなった。市街地ないし住宅地に分散して居住するのが前

者ならば、郊外の移住地に固まって住むのが後者である。後者の場合、日系移住地のなかでは日本語が通じるため、三世でも日本語ができることが珍しくないが、前者では二世でも渡日前に日本語を使える者は少ない。F一家の妻の場合、父親が都市の専門職であることから、日本語ができないばかりでなく自営業が中心である日系社会との接点も少なかったと思われる。

- (7) 南米式バーベキューのことだが、アルゼンチンでは休日にアサードでパーティーをやるのが習慣となっており、クリスマスも大晦日もアサードで祝うほど生活に浸透している。筆者らも、数え切れないくらいアサードに招かれた経験がある。その意味で、皆でアサードをすることは日本のバーベキューとは異なり、祖国の味と娯楽を再現する象徴的な意味を持つ。五月の連休になると、神奈川県海老名駅周辺にある相模川中流の川原では、南米出身者のグループがいくつも並んでアサードを楽しんでいる。
- (8) 神奈川県内の公立中学では、相対評価ではなく絶対評価を採用しているため、この成績は全体のなかでの位置を厳密にあらわすものではない。
- (9) こうした行動については、いずれ稿を改めて紹介していきたい。
- (10) 1.5世代という概念とその下方移動の可能性については、Portes and Rumbaut (2001)、Rumbaut and Portes (2001)を参照。

文献

- Dhanani, S. and I. Islam, 2002, "Poverty, Vulnerability and Social Protection in a Period of Crisis: The Case of Indonesia," *World Development*, 30(7): 1211-31.
- 樋口直人・稲葉奈々子, 2008a, 「デカセギと家族(1) — 日本就労の意図せざる結果・A家の場合」『徳島大学社会科学研究所』21号。
- , 2008b, 「デカセギと家族(3) — 完全な定住と事実上の定住の間・C家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』41号。
- , 2009a, 「デカセギと家族(4) — 日本で育った子どもが帰ってから・D一家の場合」『徳島大学社会科学研究所』22号。
- , 2009b, 「デカセギと家族(5) — 家離散と再結合の過程・E一家の場合」『茨城大学地域総合研究所年報』42号。
- , 2009c, 「アルゼンチンからデカセギ研究・序説 — デカセギの概要と仮説提示の試み」『茨城大学地域総合研究所年報』42号。
- 樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文, 2007, 『国境を越える — 滞日ムスリム移民の社会学』青弓社。
- 稲葉奈々子・樋口直人, 2008, 「デカセギと家族(2) — 農園維持の世帯戦略・B家の場合」『茨城大学人文学部紀要(社会科学科論集)』46号。
- 黒崎卓, 2009, 『貧困と脆弱性の経済分析』勁草書房。
- Maletta, H. & S. Lepore, 1990, "La colectividad japonesa en la Argentina," *Estudios Migratorios Latinoamericanos*, 15-16: 425-521.
- Portes, A. and R. G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*, Berkeley: University of California Press.
- Rumbaut, R. G. and A. Portes eds., 2001, *Ethnicities: Children of Immigrants in America*, Berkeley: University of California Press.

(付記) 本稿は科学研究費による研究成果である。一家でインタビューに答え、追加で聞きた

いことがあったらいつでも問い合わせてくださいという姿勢をお示しいただいたF一家の皆さんに感謝したい。

